

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2022 年

No. 140

2022年11月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会

THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL https://www.jase.faje.or.jp 発行人 石川哲也 編集人 中山博邦
© JASE. 2022 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

“先生”を目指す学生へのセクシュアリティ教育…… 1	多様な性のゆくえ⑥…… 12
第13回世界性の健康デー東京大会・報告…… 8	今月のブックガイド…… 13
いつきの“ヒューマン・ピーニング”②③…… 11	JASEインフォメーション…… 14

“先生”を目指す学生へのセクシュアリティ教育 『もあふるオンライン教育実習』における実践

『もあふるオンライン教育実習』共同代表 今川 裕太

はじめに

2003年7月4日、都立七生養護学校に対して東京都教育委員会が行った理不尽なセクシュアリティ教育バッシングから約20年が経ち、ようやく、教育関係者や保護者、教育に関わる企業の中でセクシュアリティ教育の重要性が再認識されるようになってきた。この流れは、非常に良い兆しのように感じられる。

しかし、現在でもまだ、学習指導要領上の「歯止め規定」は健在であり、教育現場でのセクシュアリティ教育における大きなハードルの一つとなっていることは自明の理である。また、性の多様性に関する教育についても、文部科学省は、2010年4月23日付の『児童生徒が抱える問題に対しての教育相談の徹底について』を皮切りに、これまでに通知を2つ、調査結果の発表通知を1つ、教職員向けパンフレットを1つ出しているが、未だに学校現場における性の多様性に関する問題は山積している。

学校現場におけるセクシュアリティ教育運動の一つの目標は、学校の中で児童生徒に対して必要なセクシュアリティに関する指導を“堂々と”行えるようにすることであると考ええる。我々『もあふるオンライン教育実習（以下、『もあふる』）』は、その目標の前にクリアしなければならない一つの問題があると考えている。それは現状セクシュアリティ教育の担い手になり得る教員へのセクシュアリティ教育がほとんど行われていないという問題である。この問題は、将来的に教育課程内で、より具体的なセクシュアリティ教育を行えるようになるまでに必ず解決しておく必要がある問題だと考えている。

また、教員自身が指導を行わない場合であったとしても、教育相談を行う際や、外部講師選定や外部機関との連携を行う際にセクシュアリティに関する視点や選択肢を持ち合わせていない教員が大多数だということである。性の多様性に関して、日高庸晴宝塚大学教授の調査（2021）では、出身養成過程において同性愛について学んだことがある教員は12.4%、性同一性

障害について学んだ教員は13.3%であった。現に『もあふる』を受講している学生は、全員、学校種・教科を問わない『教員免許状』取得予定であるが、受講申し込み時のアンケートにおいて、受講希望者の82.8%が大学の教員養成課程の中で性教育に関しては学んでいないと回答している。

『もあふるオンライン教育実習』は、「教育実習をもっと実りのあるものに」をミッションとして掲げている。そのミッションとは、教師を目指す学生に向けて、教員養成課程ではあまり扱われていないが、教育現場で必要とされていることに関する素養の養成である（現在はセクシュアリティ教育のみ）。受講生の募集やプログラムを全てオンラインで行っており、現在、法人化準備中の任意団体である。そんな『もあふる』に参加しようとする学生は、セクシュアリティ教育に関する情報収集感度が高いと考えられるが、その約8割が教員養成課程でのセクシュアリティ教育を経験していないと回答している。それはとりもなおさず、教員養成課程におけるセクシュアリティ教育が不十分であることを表していると言っても過言ではない。

以下、『もあふる』の活動の背景やプログラムの主な内容、運営方法、実習生たちの様子などを紹介する。

活動の背景

文部科学省は、世界がコロナ禍に見舞われた2020年8月に『教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令の施行について（通知）』という通知を教員養成に関わる諸機関に通達した。その通知の要点は「新型コロナウイルス感染症の影響により…教育実習の科目の単位を修得できないときは、課程認定を受けた教育実習以外の科目の単位をもってあてることができる」というものである。

近年「就職前に想像していた教師像とのギャップや、大学時代に学習した知識や技術だけでは能力不足であると感じること」が一因となり、「1年間の条件附採用期間中に依願退職する新任教員が増加している」（「新任教師のリアリティ・ショック要因尺度の作成」松永美希他、2017）。

もちろん、学校現場はコロナ禍における対応により教育実習生の受け入れどころではなかったため、文部科学省の出した通知は評価できる。しかし、この通知

を読み、筆者は、正規の教員養成課程の中で唯一学校現場を経験することができる『教育実習』という仕組みを経ずに教員になることは、新任教員の就職前後のギャップをさらに増加させるのではないかと懸念を抱いた。また、現行の教員養成過程の内容について疑問を抱くきっかけにもなった。

そこで筆者を中心に2020年11月に立ち上げた任意団体が、『もあふる』の前身である『オンライン教育実習』である。オンライン教育実習では当初、教育課程内の教科・科目を中心に扱う計画であったが、大学院在学中に教員養成におけるいくつかの課題に直面したことから、『オンライン教育実習』をベースに包括的セクシュアリティ教育をテーマの一つとして取り扱う『もあふるオンライン教育実習』を発足することにした。

課題は、教員養成課程ではセクシュアリティに関する講義が必修ではなく、セクシュアリティに関する内容がほとんど取り扱われていないこと。さらに教員の仕事を体験するにあたって、教育相談を中心とした教科以外に関することをテーマとして扱うことへの需要が高まっていると思われること。教員養成課程の学生をメインターゲットとした包括的セクシュアリティ教育を行っている講義や民間および公による事業が少なく、セクシュアリティに関する視点をもった教員を養成する土台ができていないこと等が挙げられる。

様々な課題への対応策を考える中で、コロナ禍により教育現場でのICT機器への適応困難が浮き彫りになったことが、オンラインでプロジェクトを始めるきっかけとなった。2021年7月1日からクラウドファンディングを始め、延べ314名の方から170万3001円のご支援をいただき活動を開始した。2021年9月の第1期生を皮切りに、2022年10月現在、第4期までの受講生たちが『もあふる』でセクシュアリティについて学んでいる。

『もあふるオンライン教育実習』のシステム

『もあふる』は、①受講生が学校現場で生かせる包括的セクシュアリティ教育を学ぶ『オンライン教育実習（セクシュアリティ教育プログラム）』と、②学校の先生や保護者の方、セクシュアリティや教育に関心のある学生の方々を対象とした、受講生たちが学んで



「もあふるオンライン教育実習」のホームページと QR コード

いる様子をライブ配信やアーカイブ動画で見ながら、包括的性教育について一緒に学ぶ、月額会員制の『オンラインコミュニティ』で構成されている。

①『もあふるオンライン教育実習』セクシュアリティ教育プログラムについて

「教師が授業を行うには欠かせない業務である『授業を作ること』と『授業を行うこと』の一連の流れが教師にとっての最適な学び方の一つである」という仮説を基に『もあふる』のプログラムは構成されている。

各期、運営メンバーの面談を経て選ばれた3～4名の受講生（以下、実習生）は、オンラインツールを使って行われるプログラムを受講しながら、実習生自ら選択したテーマで『国際セクシュアリティ教育ガイダンス【改訂版】』（UNESCO, 2020）に準拠した50分間の授業を作り、研究授業のような形で発表することを通じて、学校現場で必要なセクシュアリティに関する視点を学んでいく。

●コンセプト

本取り組みは、「授業を作る過程において、学校現場で活きるセクシュアリティに関する視点を涵養し、学校現場で児童生徒と関わる際や外部講師・外部機関と連携する際に、セクシュアリティに関する視点を活かすことのできる教員を養成する」ことを目的としたものであり、「学校現場で児童生徒に対してセクシュアリティ教育の授業をする」ことを主軸としたものではない。そのため、本プログラム内でセクシュアリティに関する知識を網羅的に提供することはしていない。むしろ、「授業」を目的ではなく手段として捉え、プログラム外で主体的に学ぶ力・学び続ける力を養うためのプログラムとして構成している。

本プログラムは3か月間、全13回各90分を基本として構成されている。これに加えて、各期、実習生

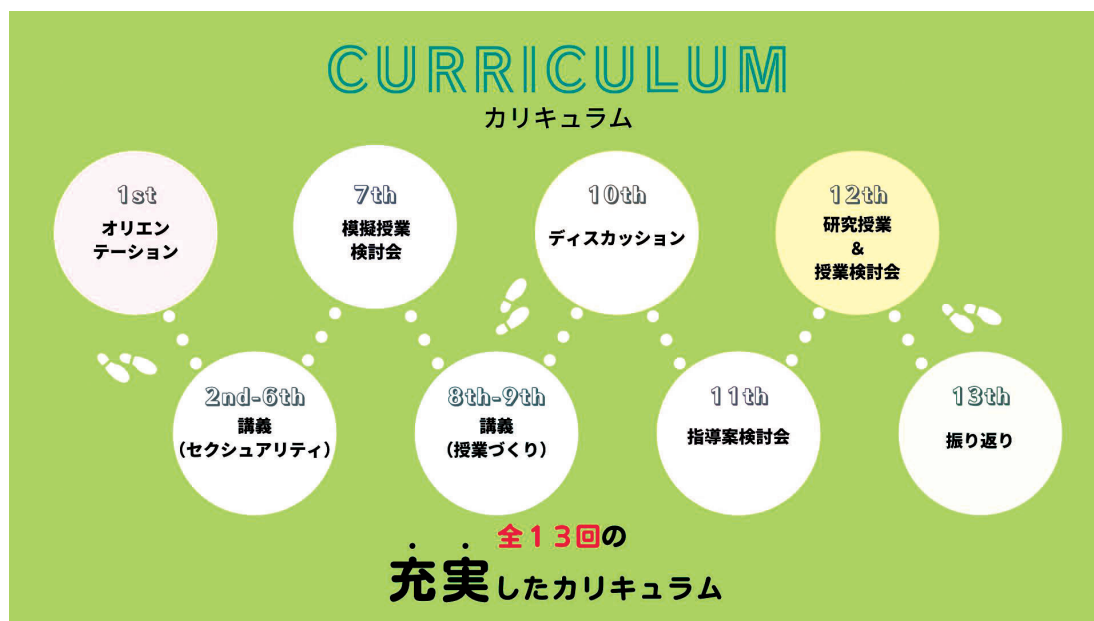
以外の一般の方も参加できる特別講演を1～2回開催し、全14～15回のプログラムとしている。これは大学の教員養成課程や、教職大学院の科目として導入する際に対応できるようにするためである。

前述の通り、本プログラムは日本の「2単位時間分の大学の講義」を参考に組んでいる。そのため、学習はプログラム内に留まらず、プログラム外での学習を実習生には求めている。具体的には、実習生は講義ごとに Google フォームを活用した『レポート』の提出を行う。レポートでは、「講義で得た学び」や「講義を受けて出てきた疑問や課題」についてアウトプットをする。学習した内容を学んだままにするのではなく、すぐにその内容をアウトプットすることや、講義中に出てきた疑問や課題を明らかにし、それについて書籍や論文、『セイシル』（株式会社 TENGGA ヘルスケア）や『ライフデザインオンライン』（NPO 法人ピルコン）などの優良サイトを利用し、主体的なインプットにつなげることによって学びの定着を促している。

また、本プログラムでは2度、授業を作る課程を設けている。1度目は「宿泊学習前の保健指導」について約20分程度で作成するものであり、2度目は各実習生が課題感を持っているセクシュアリティに関連したテーマを主題とした研究授業である。

2度の授業作成を通して、これまでに学んだ内容を復習したり、足りない情報を主体的に補足したりしながら授業を構成していく。このような授業を作る過程におけるプログラム外のインプットと、学習内容を授業に落とし込み、その授業を行うことによるアウトプットを繰り返すことによって、セクシュアリティに関する視点を習得することを重視している点が本プログラム最大の特徴であると考えている。

これらの授業を作る過程における学習をより効果的なものにするのを目的とし、本プログラムではセク



シュアリティや教育に関する専門家だけでなくセクシュアルマイノリティ当事者の方などを講師として招聘している。

●カリキュラムの内容

第1回のオリエンテーションでは、前期の実習生の中から有志を募り模擬授業をしてもらう。これは、学習におけるロールモデルを実習生に提示すると同時に、授業のイメージをつかんでもらうためである。

第2回から第6回までは、セクシュアルマイノリティ当事者の方や、HIV 陽性であることを公表されている方、養護教諭、元法務教官、外部の専門機関で児童生徒のセクシュアリティに関する相談対応をしている専門家の方などを講師として招聘し、ご自身の経験や児童生徒の実態、実際に行っている取り組みなどについて対話を交えながら講義をしていただく。

実習生が講師に対して質問や疑問を投げかけやすくなることや、将来実習生たちが現場に出た際に相談できる外部機関として講師とのつながりを大切にしたいという理由から、『もあふる』では実習生の数を少人数にしている。

第7回の講義では、前述した「宿泊学習前の保健指導」について、約20分程度で作成し、事前に録画した動画をオンライン上にアップロードする。実習生たちは他の実習生のアップロードした動画を見ながら講義に参加し、実習生同士の相互検討会を行う。相互学習とラーニングバイティーチングの手法を混合して行うことによる相乗効果を狙っている。

第8回及び第9回の講義では、現職の教員や教員経験者を講師として招聘し、授業づくりに関する講義をしていただく。学校でセクシュアリティに関する指導を行うのは難しいのではないかという学習指導要領に対するバイアスを取り払うことや、アクティブラーニングの手法を効果的に授業に取り入れる考え方などを養成することを目的としている。実際に一度授業を作成した後であるため、授業づくりの難しさや、意識すべきポイントなどが認識しやすくなるよう工夫している。

第10回では、講義を受け持っていた講師の方々から数名を招聘し、事前に運営が提示したディスカッションテーマについて、実習生を交えたディスカッションを行う。これまでに、「予防的な性教育と対処的な性教育、あなたはどちらをより重要視していますか?」「陰茎指導、男女別習共習どちらでやりますか?」「同意は言葉にしなくても成立すると思いますか?」などのテーマについてディスカッションを行っている。

第11回では、第12回研究授業の際の指導案を現職の教員や教員経験者と共に検討する。

第12回では、オンライン上で一般参加者を募集し、ある程度の人数を集めた上で、実習生がそれぞれ関心のあるセクシュアリティに関連するテーマを主軸とした研究授業を行う。『もあふる』では、実習生にはオンラインで行うことを前提に授業を作ることを求めている、必要な ICT 機器やアプリケーション、ソフトウェアなどの準備まで含めて授業づくりと捉えている。

研究授業発表例（一部抜粋）

SNSに潜む危険性と付き合い方
だいじなからだ
What is Gender stereotype? (英語科)
健康な人間関係ってどんな関係？
制服について考えてみよう（家庭科）
日本に住んでいる家族にはどんな特徴があるだろう？（社会科）

これまでに上表のような内容の研究授業を実習生たちが発表した。教科・科目を問わず様々な視点からセクシュアリティについて学ぶ授業が生まれている。各実習生の研究授業の後に、一般参加者も含めた授業検討会を行っている。

第13回では、修了証の授与と、実習生たちが「もあふる」での学びを振り返る。

●実習生たちのレポート

実習生たちが書いたレポートの内容をいくつか紹介したい。

・実習生 A（性の多様性に関する講義後）

今回の講義で印象に残ったのは、理解はできなくても、「受容」はできるということです。育ってきた環境やそれぞれの価値観で、「普通」「常識」は異なるので、時には、理解できないことがあるかもしれませんが、それに対して、受け入れることはできます。人のことは、100%理解できるわけがありません。なぜなら、人それぞれ感じることは、違うから。だから、私

は自分が理解できることには、ともに話を深め合い、そのほかに対しては、受け入れを行っていきたいと思いました。

・実習生 B（振り返り後）

最終的に行き着くところは、人と人の関わり方なのだと感じました。人間は何か不安に直面した時、考えをすぐ極端に寄せてしまいます。例えば、性別が男か女か、などがその良い例かも知れません。でも、その極地に相手や自分を寄せるのではなく、ありのままを観ることが大切だと思いました。性別に囚われず、相手という人間をそのまま好きになる。自分の中で何か「違和感」が生まれたら、なぜ・何が違和感なのかを徹底的に見つめる。そういった態度によって、頭の中で解釈が少しづつ増えるのかも知れないと思いました。そういった解釈のストックを時間をかけても良いから増やしていくと、どんな人でもそのまま受け止められるようになるのかも知れない、と感じました。

・実習生 C（ディスカッション後）

生徒の在り方を否定することなく対応し、生徒のために周りの人に適切な協力を仰ぐことができるだけで十分だと思います。生徒に向き合う中で、常に自身の認識をアップデートできる、学ぼうとする姿勢が必要なのではないかと思います。

・実習生 D（性加害・性被害に関する講義後）

今回の講義で学んだことは、「当たり前を疑う」「いろんな可能性を考える」「正しさを人間は変わらない」ということです。まず、「当たり前を疑う」というの

＜講師紹介＞



高橋昭明先生
ダイジェスター・HIV感染症
レインボー・バレット・くまもと2018代表



山口健一先生
一般社団法人XGLLY代表
専任講師



井上健斗先生
株式会社G-pit代表取締役
トランスジェンダーFTM



星野貴泰先生
日本性科学学会理事
手術看護師・性教育講師



Ray / れい先生
Cosmopolitan/
ノンバイナリー・Xジェンダー



庄子寛之先生
東京都立小中学校指導教諭
学校運営執行委員・性教育委員



にじいる先生
元職員の
フリーランス性教育講師



小泉志信先生
小学校指導教諭
一般社団法人まなびばと代表



OKyon!! 先生
元職員の
専任講師・性教育講師



安部順(へい)な先生
カウンセラー・教育家
元法政大学



古内しんご先生
「つみき」代表
教育コーディネーター
小学校教諭



船津裕子先生
薬剤師・思春期保健相談士
NPO法人女性医療
ネットワーク副理事長



まー先生
Xジェンダー・パンセクシュアル当事者
元幼稚園教諭・元保育士



都司日奈乃先生
千葉大学大学院教育学研究科
博士課程1年



レーマ先生
FTMオネエ活のママ



鈴木伶那先生
薬剤師・思春期保健相談士
スポーツファーマシスト

先生のためが
「セクシュアリティ」について
多面的に学ぶ3ヶ月。
仲間と一緒に、
「性」について考えませんか？
お問い合わせ: moreful.edu@gmail.com

これまでに招聘した講師の先生方

5

は、「〇〇だから××する」という自分が経験してきたものがすべてじゃないと思うということです。講義中に「教師だから教える」だけじゃないということを聞いて、はっとした。

科学的に証明されている所謂“正しいセクシュアリティ教育”を行うことは非常に重要なことであると考えるが、『もあふる』ではそれを行う前に、教員が自分のこれまでの経験や学び、常識、固定観念に縛られることなく、児童生徒のありのままの実態を把握し、それを受け止め、児童生徒との信頼関係を作る必要があると考えている。実習生のレポートでは、セクシュアリティに関する視点を、人と人とのコミュニケーションを行う上で重要なものと捉え、児童生徒と向き合うとはどういうことなのかについて考察しているものが数多く見られる。

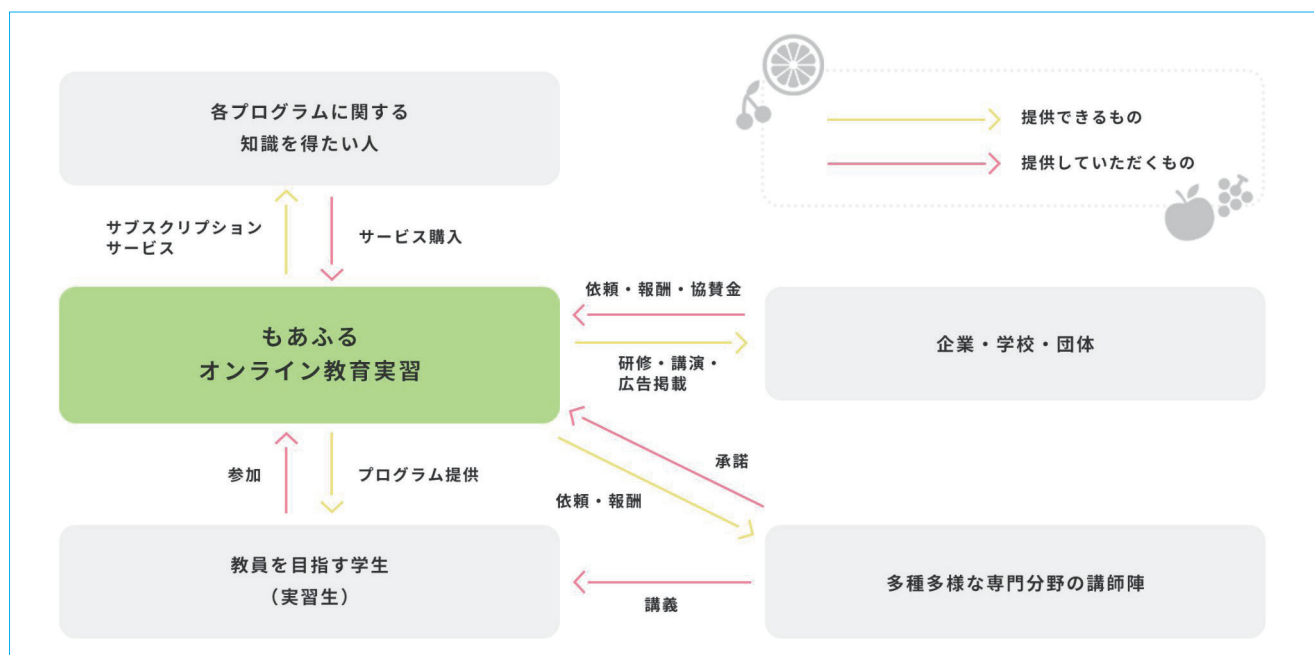
セクシュアリティ教育において最も重要なことは、

学校現場でセクシュアリティ教育を行うことではなく、児童生徒のウェルビーイングを実現するためにセクシュアリティの視点を学校現場で活用することであると我々は考えている。つまり、教員は学校現場においてセクシュアリティ教育の授業を行うだけでなく、児童生徒の実態を傾聴し、然るべき専門家や専門機関に「リファー」していく役割も担っていることが考えられる。

教員1人で抱え込むのではなく、学校全体や他機関と協力をしながら児童生徒のウェルビーイングの実現に向けて取り組む必要がある。オンライン教育実習を受けた実習生たちがこのような視点をもった上で、教育現場で活躍することはとても頼もしいことであると感じている。

②『もあふるオンラインコミュニティ』について

教員の労働問題が大きな社会問題として取り上げられる現代において、教員になろうとする学生たちを応



「もあふるオンライン教育実習」の構造



もあふるオンラインコミュニティ

「もあふるオンラインコミュニティ」のロゴとQRコード

援する仕組みを作りたいと考えできたのが月額サブスクリプションサービス『もあふるオンラインコミュニティ』である。

実習生たちが学ぶ様子をクローズドな環境で、ライブ配信やアーカイブ動画として公開し、セクシュアリティについて学びたいと思っている教員や保護者、教員免許状取得予定でない学生などが学べる環境を提供している。

具体的なサービス内容は、月額 1100 円で、①各回講義のライブ配信・アーカイブ動画の視聴、②各回講義内容をまとめたブログ記事の閲覧、③不定期に開催される特別講演の無料参加、④掲示板による学びの共有、である。

『もあふる』では実習生から受講料を徴収しておらず、『オンラインコミュニティ』からの収入が『オンライン教育実習』の運営費に充てられる。そのため、教員や保護者、その他の学生が『オンラインコミュニティ』を通してセクシュアリティについて学んでいることが実質的に実習生たちを応援していることにつながる。

このような、これからの日本の教育をになっていく若手教員たちを応援する仕組みは非常に重要であると思いついて運営している。

おわりに

文部科学省は令和 2 年度から 4 年度までの 3 年間で、性犯罪・性暴力対策の「集中強化期間」と設定しており、「^{いのち}生命の安全教育」を推進している。そのため、「生命の安全教育」で扱われている内容に関しては、学校現場においても取り組まれるようになりつつある。しかし、その「生命の安全教育」を行う教員は養成課程においてセクシュアリティに関する視点をほとんど学んでいないどころか、性教育バッシングが現在よりも過激になされていた時代に教育を受ける側であったため、そもそも学校教育においてもセクシュアリティ教育を受けていない場合が多い。

教育段階でセクシュアリティ教育を受けてこなかった世代が教員となり、児童生徒に「生命の安全教育」を行っているのが現状であり、十分な内容のセクシュアリティ教育を受けられるか否かは、管理職や主幹教諭らが積極的な場合をのぞき、指導を行う教員個人の

意識と自主的な学習に委ねられている。つまり、児童生徒が十分なセクシュアリティ教育が受けられるかどうかは「運しだい」であると言える。

教師が十分にセクシュアリティに関する視点をもたないまま児童生徒に性に関する指導を行うことは、セカンドレイプやアウティングなどの性被害を産むだけでなく、教師や学校現場への不信感から不登校や学級崩壊などの教育問題へとつながる可能性も考えられる。また、教師が直接指導しなかったとしても、外部講師を選定する際に、極端な考えをもった講師を選んでしまい、児童生徒に悪影響が及ぶ危険性もある。

そして、十分にセクシュアリティに関する視点をもたない教員から学んだ学生が教員になる際には、その学生が自主的に学習をしない限りは、同じような教育が再生産されるのである。このような悪循環を打開するためには、教員養成課程にてセクシュアリティに関する視点を養成していくことが極めて重要であると考えている。そのための取り組みが『もあふるオンライン教育実習セクシュアリティ教育プログラム』であり、「セクシュアリティ教育を教員養成課程の必修科目とし、児童生徒に関わる全ての教員が『セクシュアリティに関する視点』を持ったうえで現場に出て活躍すること」を最終的な目標として活動をしている。本取り組みが教員養成におけるセクシュアリティ教育を推進していく一助となれば幸いである。

●問い合わせ先

mail: moreful.edu@gmail.com

【参考・引用文献】

- ・ユネスコ、2020『国際セクシュアリティ教育ガイダンス【改訂版】 科学的根拠に基づいたアプローチ』
- ・文部科学省、2020「教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令の施行について（通知）」（最終閲覧日 2022 年 9 月 16 日）
- ・文部科学省、2020「性犯罪・性暴力対策の強化の方針の決定について（通知）」（最終閲覧日 2022 年 9 月 27 日）
- ・郡司菜津美、2018「教員養成における性教育指導の学習効果 ラーニングバイティーチング形式による理解度の変化に着目して」（最終閲覧日 2022 年 9 月 16 日）
- ・松永美希・中村菜々子・三浦正江・原田ゆきの、2017「新任教師のリアリティ・ショック要因尺度の作成」（最終閲覧日 2022 年 9 月 16 日）
- ・日高庸晴、2021「子どもの“人生を変える”先生の言葉があります 2021」（最終閲覧日 2022 年 9 月 26 日）

◎東京性教育研修セミナー 2022 夏／第 13 回世界性の健康デー東京大会・報告

プレジャーについて語ろう

LET'S TALK PLEASURE !

9月4日(日曜日)第13回目となる「世界性の健康デー 2022 東京大会」が開催された。本年は「LET'S TALK PLEASURE !／プレジャーについて語ろう」が世界共通テーマである。コロナ禍の本年も、昨年同様オンライン開催となった。プログラムは3部構成で、第1部がトークセッション1「若者のリアルと性教育のトレンド」、第2部が「性の健康に関する団体の活動報告」、第3部がトークセッション2「日本の性教育をプレジャーの視点で問い直す」。

ここでは、視聴者の声を中心にイベントの様態を紹介する。

◆トークセッション1 若者のリアルと性教育のトレンド

近年、様々な性教育団体が多様に活動を行っている。このセッションでは、様々な性教育の活動取材してきたテレビディレクターと、若者の動向(若者世代が性に関する知識ニーズをどのように満たしているか等)に詳しい識者を迎え、若者のリアルな動向と、市井の性教育活動の実際について話を展開し、今性教育に求められるものや今後性教育活動に必要なものなどについて語っていただいた。

登壇者は、Eテレ(NHK教育テレビ)で放映された「教えて!性の神様」などの制作を担当したNHK第2制作センターのディレクターである荒井拓さんとオーストリアから交換留学生として来日し、日本で大学院博士課程を経て明治大学の助教になられたパッハー・アリスさん。モデレーターは「性の健康イニシアチブ」の柳田正芳さんが務めた。

このトークセッションに対しては、次のような感想が寄せられた。(文責編集部)

★若者の視点というより世代は問わず性教育について考えることができた。普段話の聞けないお二人から、令和時代の性教育への向かい方を指南してもらえたようで、とても勉強になりました。特に、アリスさんのような世界と比較して自分の国で行われている性教育や性のタブー視を学生自身で考えることで、



自分事化されるのは今後取り入れてみたいと思いました。

★とても刺激的でした。近年のNHKの番組はとても評価が高かったので、制作側のお話が聞けて、良かったです。アリス先生もとても素敵な方でした。本も読みたいです。

★セクソロジーを大学時代に卒論テーマに選んだ私にとって、それが日本の新しい性教育に代わる言葉として話題になっていたことがとても嬉しく感じました。また悪い歴史に問題意識を向けて突き詰めることはやってきたけど、荒井さんからの2017年以降の性教育の日本の捉えられ方が変わりゆく様子はとても肯定的で温かい情報で励みになったような気がします。また若者のみならず、どの世代への性への疑問の受け皿も備えていく視点、進行も大切な意義と考え直す部分がありました。

★若者がジェンダーや社会活動に興味関心が高いということに希望が持てました。ここ数年で性に関する

情報をメディアで多く見かけるようになりましたが、制作している方からお話が聞けて時代の流れを整理できました。アリスさんのお話では「感情教育」というキーワードが印象的で、学生の「好きっていう気持ちがわからない」「フラれた時にどう乗り越えたらいい？」などサークルで話されている具体的な例をあげてもらい、自分の感情や人間関係についてひとりで抱えて悩みがちということがわかりました。アリスさんが生まれてくるお子さんにどんな性教育の絵本を読ませようかとワクワクされている姿に、次世代に新しい価値観がバトンタッチされていくのを感じました。

★スピーカーの方々とチャットをうまく交えたインタラクティブなセッションでとても聞きやすかった。アカデミアの方とメディアの方という組み合わせもよかったと思う。

★わかりやすかったことは、これまで性教育視点でどのように性教育が盛り上がってきたかについて論じるのを聞いてきたが、メディアと作る側から聞くことができたのはおもしろかった。

メディアは、世間の声から成り立つものであり、世間の声を変えるものでもあるということを感じた経験でした。実際のこの性教育ムーブメントだけでなく、過去のバッシングについても置き去りにしなかったところが本当によかったです。

★最近の人が、性に関する事項（特にジェンダー）への関心が高くなっていることを肌で感じていましたが、数年前は性に関する具体的な文言をメディアで発信することに対して批判があったというのをメディア関係の方目線で聞けて、世論の変化をあらためて実感しました。荒井さんが、性教育に関する発信を諦めずに続けていたということにとっても尊敬しました。ジェンダーの問題によって苦しめられたり、悩んだりすることがこれからも軽減するように、正しい知識を広めたり、タブー視しすぎないように性への認識がこれからも日本でも広まっていく社会であればいいなとも思います。

★NHKの荒井さんが足立区の性教育に関する世間の肯定的な反応を取りあげてくださり、世の中の風潮がよりリアルな性教育を求めていると感じました。

アリスさんの学生の疑問に応じたオープンな講義のように、現場での教育を積み重ねていくことで、

国の性教育に対する方針が変わると良いと思います。

★とても分かりやすかったです。アーカイブ視聴したため、チャットに載せられていたと思われる情報が得られなかった点は少し残念でした（参考URLなど）。

◆トークセッション2

日本の性教育をプレジャーの視点で問い直す

今年の世界共通テーマ「LET'S TALK PLEASURE! / プレジャーについて語ろう」は、2019年に性の健康世界学会の世界大会（メキシコシティ）で採択された「セクシュアル・プレジャー宣言」を念頭に置いたテーマである。セクシュアル・プレジャーを日本語にすると「快楽至上主義」的な解釈をされてしまう向きもあるが、本当の意味するところは「誰かの犠牲や我慢のうえに成り立つ快楽は存在しない」といった人権をベースにした概念である。

「真面目に」「衛生的に」「清く正しく」というイメージが先行して持たれがちな性教育だが、性を通じた快楽と人権の視点も含めて問い直した時、どのような性教育が浮かび上がるのか、識者とのトークから探った。



登壇者は、性教育の先進国といわれるスウェーデンへの留学経験をもつ「#なんでないのプロジェクト」代表の福田和子さんと元滋賀県立高校保健体育科教諭で「びわこんどむプロジェクト」代表の清水美春さん。モデレーターは、セッション1と同じく柳田正芳さん。

このトークセッションに対しては、次のような感想が寄せられた。（文責編集部）

★今までの性教育から、「プレジャー（快）」の部分にフォーカスして考えたことはなかったので、目からうろこでした。しかし、日本の性教育で確かに「#なんでないの」のようなものに誰でもアクセスでき

るようになれば、快を前向きに伝えられるのかなと清水先生の話聞いて印象に残りました。

- ★日本の性教育はプレジャーとはかけ離れているので、このセッションは成り立つのだろうかと思案していましたが、三人の力量でみごとに展開してくれました。
- ★自分自身、プレジャーの視点を失っていました。性の問題を考えると少し暗くなることも多いのですが明るい話題も提供できるように頑張っていきたいと思います。
- ★福田さんが話されていた「禁止事項ばかりでなく、自分が心から好きなものを選択できるワクワクする経験の大切さ」にうんうん頷きました。また清水さんの「実際にコンドームに触れてみよう」という試みは裾野を広げていくための地道な活動のひとつと捉えられたことで、自分自身がトランスジェンダーの立場で、性教育を受けたくない気持ちにひとつ終止符が打てたような気がします。ただまだまだ男女を強く連想させられてしまうコンドームに触る体験を、男女分けたペアにしてしまうのは残念だと思いました。

今後変わっていくことを信じていますが、むしろ男女混合でペアを組んで考えることがジャーナルスタンダードになっていくと、(確かにその場は恥ずかしがってしまう人も多いかもしれないけど)お互いを本当の意味で大切にしたいって、気遣って、その基盤上で想い想いのふたりの豊かな快楽の探求につながって行くのかなとも思いました。

- ★刺激的でした。仲間と話すのは楽しいし、勇気ももらえますが、しかし sexual pleasure を前面に出すのには抵抗勢力が大きいことを覚悟しなければ、と改めて思いました。
- ★福田さんのお話は様々な場所でお聞きする機会があったのですが、緊急避妊薬や経口中絶薬関連のリスクベースやプロジェクトの難しさを語っていらっしやだったので、今日の「プレジャー」について楽しそうにお話しされている姿がとても新鮮で印象的でした。清水先生がされているコンドームを実際に手に取り装着する体験型ワークショップは、参加した生徒さんが将来必要な場面で思い出し、行動に移すことができる貴重な機会になると思いました。プレジャープロジェクトの「プレジャーが組み込まれているプログラムの方がセイフーセックスや自己決定

を後押しする」というプレジャー宣言後の調査結果も大変興味深かったです。

- ★リスクヘッジな文脈が多い性教育について問題意識を持ちながらも、どうプレジャーと、性教育を両立させるべきか、について大きな光が見えた時間でした。性だけでなくプレジャーの視点と、プレジャーを獲得するために得るべき条件の話が、両方とも共存していて大切だと思って。
- ★「緊急避妊薬を薬局でプロジェクト」はまさに権利の大事な話をいつも市民の声としてとどけてくださっていることに感謝でいっぱいです。ぜひぜひこれからも、一緒に戦い、喜びあっていければと思っています。応援というよりも協同していきたいです。
- ★「誰かの犠牲や我慢の上に成り立つ快楽はない」というのがすごく心に残っています。よく考えればこれはあたりまえであるはずなのに、これがなかなか当たり前になっていない社会に対して、セクシュアルプレジャーを強く押ししているところから、これが浸透することの重要性が強く感じられました。誰もが等しく、楽しく安全な性的経験をできる世の中であれば、反対のこともよくわかると思うので、セクシュアルプレジャーは本当に大切だと思いました。
- ★ゲスト2人の発言に思いの強さを感じながらも、終始和やかで楽しいセッションでした。プレジャーは誰かの犠牲に成り立つものではないという視点は、誰もとに残さないSDGsの概念にもつながると思います。自分の性コンテンツとの関わりでも、プレジャーの視点を大事にし気をつけていきたいです。

なお第2部の性の健康に関する団体の活動報告では、「セックスミュージアム設立準備委員会」と「緊急避妊薬を薬局でプロジェクト」の活動が、それぞれの団体の代表者から報告された。

今年度の「世界性の健康デー東京大会」の有料配信申込み人数は延べ69名であった。教員(教諭・養護教諭・大学教員)、医療関係者、大学生、NPO活動家、マスコミ関係者、会社員など幅広い職種の参加者があった。

主催：世界性の健康デー東京大会実行委員会

協賛：日本性教育協会

後援：日本性科学会、一般社団法人日本性機能学会、一般社団法人性と健康を考える女性専門家の会、一般社団法人日本思春期学会

いつきの“ヒューマン・ビーイング”

人権について考える ②⑩

部落差別の歴史「で」学ぶ

土肥いつき

京都の公立高校教員。24 時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

1998 年、わたしは担任から同和教育の担当になりました。この人事は、わたしの教員としてのあり方に大きな変化をもたらしました。その最大の変化は、職場にとどまる時間でした。担任時代はクラスの子もたちと一緒にいることを最優先にしたので、出張はもちろんのこと、年休もとらずに、ひたすら教室にいました。しかし、同和教育担当になることで、学校の外に出る機会が増えました。その結果、さまざまな研修会に参加することができるようになりました。なかでも「部落史の見直し」についての研修は、わたしの部落に対する考え方を大きく変えました。

前号でも書いたように、担任時代は、賤民身分は江戸幕府によってつくられたと考えていました。それに対して、「部落史の見直し」が提示したのは、部落の起源は中世にまで遡れるということでした。このパラダイムの変換は、単に「起源がいつか」ということにとどまりませんでした。例えば、従来は貧しいとされていた被差別身分の人々も、個々の部落の歴史を調べる中で、実は必ずしもそうでなかったとされ、被差別身分の人々の多様なありようが示されました。さらに、従来は、差別・被差別の関係を「上下」ととらえていたのに対し、「忌避・排除」ととらえるようになりました。なかでも、わたしに大きな気づきを与えてくれたのは、ある講演の中で聞いた、部落の古老によるものとされる次の言葉でした。それは「美しければ、きたなければ、金があれば、貧乏だから、此の下に総て差別的言辞が付随する」でした。

部落問題学習をすると、生徒たちは「なぜ部落差別があるのかわからない」と言います。わたしは、「だから言われなき差別なのだ」と返していましたが、これは説明したことにはなっていません。そんなわたしに、先の古老の言葉は答を与えてくれました。それは、「差別が先にあり、理由は後づけである」ということでした。つまり、差別の理由は部落にあるのではなく、部落に対する人々の「まなざし」と、それをつくりだす社会構造にあるということがわかったのです。

さらに、大阪の大正区にある関西沖縄文庫の金城きんじょう馨かおるさんの講演からもヒントをもらいました。それは、「現在、外国人に対してある差別は、かつて沖縄人に向けられていた差別と同じではないか」という問題提起でした。差別はその対象を変えながらも、基本的な構造は変わっていないということに気づいたのです。

わたしが現在おこなっている部落問題学習では、最初に「部落差別『で』学ぶ」とします。なぜなら、部落差別を題材として、差別を生み出す社会の構造を伝えたいと思うからです。その構造とは「排除」です。これをわたしは「あいつは違う、わたしたちは同じ」と説明します。ポイントは「同じわたしたち」というカテゴリーをつくるためには、必ず「違うあいつ」というカテゴリーが必要とされるということです。この「あいつ」を、人々はどのようにしてつくってきたのかを部落の歴史から学びます。まず、歴史を現在から遡ります。現在は文化や言葉を理由として在日外国人が排除される時代です。その少し前は在日コリアンが排除の最前線に立たされていました。その前は沖縄人、そしてその前はアイヌ、そして中世にまでさかのぼったところに「ケガレ」を理由として排除された人々、すなわち被差別民がいたとします。次に、歴史をたどりながら、被差別民に対するまわりの人々の「まなざし」の変化に着目します。それは「ケガレ」「豊かさ」「貧しさ」「不衛生」「妬み」とさまざまに変化します。しかし変化がないものがあります。それは、それらを理由とした、まわりの人々の「排除のまなざし」です。

わたしは生徒たちに「差別をなくすのは簡単」と言います。それは「排除せずに人と人がつながればよい」からです。一方「差別をなくすのは難しい」とも言います。なぜなら「排除なしに人と人がつながる方法を、わたしたちはまだ見つけていない」からです。そして、「その方法を一緒に探そう」と呼びかけます。

この学習の次の学期に、わたしの勤務校の特徴的なとりくみであるリビングライブラリをおこないます。次号ではそれについて書くことにします。

多様な性の ゆくえ

One side/No side [67]

『社会的イネーブラー』

なけなしの語学力を振り絞り、10年ほど前からエイズ関係の英文を日本語に訳す作業を続けている。

国連合同エイズ計画（UNAIDS）の報告書などを取材目的で読んでも、英文のままだと、いざ記事にしようとする時に二度手間、三度手間になってしまう。これはと思う文献は日本語にしておき、折角ならということでもブログにも載せたのがきっかけだった。

UNAIDSには無断で始めたので、「勝手にそんなことをして」とお叱りを受けるかもしれない。最初はちょっとひやひやしながらの作業だったが、2017年11月に東京・中野サンプラザで第31回日本エイズ学会学術集会・総会が開かれた際、来日したUNAIDS幹部から「そんな奇特な奴がいるのか」と逆に感謝され、スイス土産のチョコレートまでいただいた。

文献の翻訳・紹介事業はその後、UNAIDSと公益財団法人エイズ予防財団との間で協力して進めていくことが確認され、現在に至っている。

そのUNAIDSはいま、2030年までに「公衆衛生上の脅威としてのエイズ流行終結」を実現するという国際共通目標の達成に向けて、医療保健分野だけでなく、社会的な文脈からも、対策を支える基本概念を次々に打ち出している。日本語ではどう表現するのか、翻訳者泣かせの言い回しも多い。

例えば、少し前から「differentiated service」という用語がしばしば登場する。IT分野では「差別化したサービス」といった訳語がある。個人的には「エイズ対策に差別化はないでしょう」と思ってしまう。辞書を見ると、differentiateには「分化型の」という訳もある。ちょっと意味が伝わりにくい。

人にはそれぞれ事情がある。一律の対応ではなく、その個別の事情に合わせられるサービス提供体制を作ろう。あえて説明すればそういうことだろうか。これって、ひょっとすると日本のお家芸？などとも思うが、最近は絶滅危惧種のサービスなのかもしれない。適訳とは言えないが「利用者の事情に合わせた分化型サービス」などと回りくどく訳している。

最新報告書では「social enabler」が注目株だ。中学時代に覚えた enable は可能にするといった意味だったが、enabler だとどうなるのか。可能にする人？むしろ可能にするものかな。あれこれひねり回した挙句、こちらも少々、回りくどく「社会的イネーブラー（課題解決の実現を支える社会的要因）」などとカタカナ表記に注釈を加えて訳している。参考までに紹介しておく、2021年6月の国連総会エイズに関するハイレベル会合で採択された政治宣言の要約版（UNAIDS 編）は次のように説明している。

『社会的イネーブラー：HIVに関わるスティグマと差別を取り除き、女性と少女が性と生殖に関する健康と権利を求められるようにし、HIV感染の高いリスクに直面している人々に対する社会的な排除をなくするための法律や政策、教育キャンペーン』

背景を説明しておく、世界のエイズ対策はこの10年ほど、治療薬の普及が感染予防にも大きな効果をもたらすことに着目し、検査と治療の普及に力を入れてきた。実際に治療の普及は大きく進み、2020年にエイズ関連の原因で死亡した人の数は68万人だった。数値目標（50万人）には届かなかったものの大きく減少している。目覚ましい成果と言えるだろう。

ただし、年間の新規HIV感染者数は150万人で2020年目標（50万人未満）に遠く及ばない。どうしてなのかを分析した結果、治療効果を生かすには、それを阻む社会的要因にもう一度、目を向け、解決していかなければならないというごくごく当然の結論に行きついた。「感染症の流行」「医療」「社会」という三者の関係が治療の進歩を背景にぐるっと一回りして振り出しに戻った。そんな印象である。

大切なコンセプトだけに、もっと簡潔な訳語はないかと考えあぐねていたら、HIV対策の倫理的な課題を研究する東北大学の^{おおきたけとし}大北全俊准教授がenablerの仮訳として「目標達成要因」をあげていた。さすが！socialなら「目標達成の社会的要因」。このぐらい簡略化できれば、使っているうちに定着しそうだ。

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

短い文字列のなかに性の彷徨い

短詩形文学の新刊本を続けて読む機会を得た。一冊目は歌人としてメディアへの露出度が高い柊野浩一氏の、デビュー 25 周年を記念した「全短歌集」。もう一冊は森高弘氏（童子吟社に所属）の第一句集「光れ光れ」（喜怒哀楽書房）。こうした著作を読まない私ではあるが、その短い文字列のなかに浮かび上がる性の彷徨いに、大いに触発された。

柊野氏の歌集はむしろ性が希薄ともいえるのだが、五七五七七がその欲望の形を繊細に象っている。

「するたびに探したいって思うんだ セックスよりもたのしいことを」

それほど肉欲に翻弄されているわけでもないし、もっと他に楽しいことがありそうなのだが、結局またやらかしてしまう…。そんな身体の性への嫌悪と官能をうまく言葉に託している。詩歌は、昨今のセクシュアリティをめぐる学術用語よりもよほど、性愛の行間を掬い上げることができるようにも感じる。

「性的指向」というのは極めて男性的な概念だと思うのだが、女性の生理や、発情のグロスが小さい男性のそれをあまり言い当てていない。一方、自身のつましやかな性的実存を公言する柊野氏だからこそ、別の言葉でそれをユーモラスにとらえ返すことができるのかもしれない。

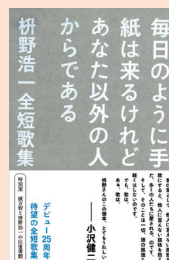
「絶倫のバイセクシャルに変身し全人類と愛し合いたい」

これとは反対に、森高弘氏の俳句からはむせ返るような「男への欲望」が屹立している。

「級友の脇毛濃かりき海の家」

「六尺をきつく締め合ひ宵祭」

西洋より輸入されたあの概念を使わずとも、男性の身体へ向けられた欲情がここではあからさまに主張し



毎日のように手紙は来るけれど
あなた以外の人からである
柊野浩一全短歌集

柊野浩一著
左右社
定価 2530 円（税込）

ている。

そう、考えてみると、私たち日本人は詩歌を通じて恋や性を語り、もっといえば吟じること自体が性そのものだった。平安の貴族はまず和歌を交わすことで情を通じ、言葉のやりとり自体にそのエロスを味わったという。まさにそのようなものとして私たちは自分たちの情愛の痕跡を文学の中に遺してきた。そして当然ながらそこには現在でいうところの LGBT など周縁的な欲望も含まれる。

例えば、近代詩を追求した萩原朔太郎も、「恋を恋する人」でこのような自身の欲望を吐露している。

「わたくしはくちびるにべにをぬって、／あたらしい白樺の幹に接吻した、／よしんばわたしが美男であらうとも、／わたしの胸にはごままりのやうな乳房がない、／わたしの皮膚からはきめのこまかい粉おしろいのほひがしな、（略）／わたしは娘たちのするやうに、／こころもちくびをかしげて、／あたらしい白樺の幹に接吻した、／くちびるにばらいろのべにをぬって、／まつしろの高い樹木にすがりついた」

朔太郎のセクシュアリティに関してはあまり語られてこなかったが、今日、その同性愛的な指向について研究の光が当てられるようになってきている。

また昨年亡くなりオペラ評論などでも知られた詩人・相澤啓三氏も、遺歌集『羊歯の谷間に』にこんな作品を遺している。

「あの二人もやがてとわれらが祝福をおくれるも知らずで青年ら過ぎ行く」

「友が愛せる若者がいつしか好き漢になりゐしを喜ぶ」

遙か昔から、私たち日本人は「カミングアウト」などという形式に頼らずとも、異形の性愛をも歌に表してきた。隠喩や直喩を駆使して、まるでその韻律こそが愛し合い、求め合う身体であるかのように。

（作家 伏見憲明）



12月3日(土) 13:00 ~ オンラインリモート開催



2022年度東北社会学会シンポジウム

「青少年の性行動全国調査」の軌跡と展開

「青少年の性行動全国調査」が1974年以来、日本性教育協会を中心に今日までほぼ6年間隔で企画・実施されてきた。このシンポジウムでは、一連の青少年の性行動全国調査研究の軌跡と現在の到達点、そして今後の展望について、現在の調査研究メンバーの3名からご報告いただく。

報告タイトル及び報告者

「青少年の性行動全国調査からみる若者の性の変容」林 雄亮（武蔵大学）

「青少年のジェンダー観とセクシュアリティの変容」石川由香里（立正大学）

「青少年の性行動と家庭環境・性教育」俣野美咲（東京大学）

コメンテーター：三輪 哲（東京大学） 司会：片瀬一男（東北学院大学）

申込み・問合せ先等

形式：オンラインリモート開催（Zoom を使用） 参加費：無料

申込方法：右記 Google フォームから <https://forms.gle/PqWaMJmiLDXMYPBz8>

Google フォームにアクセスできない方は下記メールアドレス宛てに

soc-kenkyu@ml.tohoku.ac.jp（名前、所属、連絡先を明記して）

申込み締切：11月29日（火）

主催：東北社会学会

<https://www2.sal.tohoku.ac.jp/soc/cgi-bin/wiki.cgi?page=%C5%EC%CB%CC%BC%D2%B2%F1%B3%D8%B8%A6%B5%E6%B2%F1>



JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室について

JASE 資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約6万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

【閲覧】 必ず事前に電話で予約が必要です（tel 03-6801-9307）。貸出業務は行っておりません。

【開室日・時間】 しばらくの間、月～金曜日 11:30～16:30

【休室日】 土・日曜日、祝日、年末年始 ※この他、会議等で臨時に休室することがあります。

【コピーサービス】 コピー料金は用紙サイズにかかわらず1枚10円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。

<https://www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html>

資料室
利用方法収集文献
・資料

統計・調査報告書、ジェンダー・フェミニズム、性教育一般・性教育の歴史的資料、国内雑誌、障害者、セクソロジー（自然科学系、人文・社会学系）、民俗学・文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書・指導書・学習指導要領、幼児期～青年期、国内学術誌、国際（海外団体資料・海外学術誌）、高齢者・家族問題、文学・評論・エッセイ・文庫・新書、官公庁資料、JASE 刊行物、映像資料、個人論文、雑誌記事、新聞記事、絵本・写真集・マンガ、江幡・篠崎・朝山・石川・ダイヤモンド文庫、ほか。

<https://www.jase.faje.or.jp/cgi-bin/search1.cgi>

すぐ授業に使える

性教育実践資料集 中学校改訂版

〈主な内容〉

- 第1章 中学校における性教育（性教育を実践するにあたって／性教育の目的と意義）
- 第2章 性教育の実践（性教育の現状と実践の課題／学習指導要領における性教育の取り扱い／性教育の指導体制／指導計画の作成／性教育実施上の留意点／家庭・地域との連携／中学校の性教育の今後に向けて）
- 第3章 指導事例（各学年における指導計画と指導の流れ／8つの1年生の指導事例／6つの2年生の指導事例／6つの3年生の指導事例／7つの個別指導事例／5つの組織の指導事例）
- 第4章 参考資料（性行動経験率／性的なことへの関心割合／自慰経験率／性的関心の経験割合の推移／性へのイメージ／性感染症報告数の推移／梅毒患者報告数の推移／HIV・エイズ感染者の動向／人工妊娠中絶実施率及び推移／用語解説）

すぐ授業に使える

性教育 実践資料集 中学校改訂版



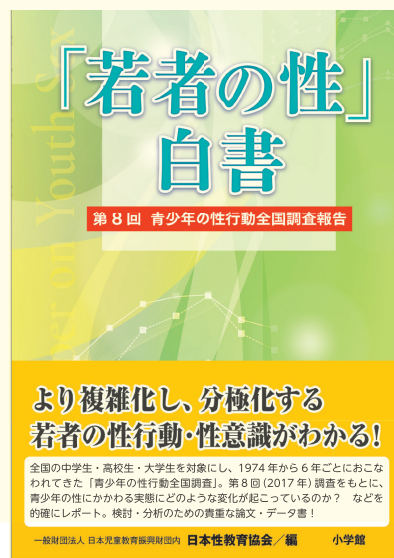
定価 2,200 円（税込） B5 判・224 ページ

「若者の性」白書

第8回 青少年の性行動全国調査報告

〈主な内容〉

- 序章 第8回「青少年の性行動全国調査」の概要
- 第1章 変化する性行動の発達プロセスと青少年層の分極化
- 第2章 青少年の性規範・性意識からみる分極化現象
- 第3章 家庭環境や親子のかかわりの違いは青少年の性行動に影響を与えるか
- 第4章 知識・態度・行動の観点からみた性教育の現状と今後の課題
- 第5章 青少年の性行動と所属集団の性行動規範
- 第6章 青少年の避妊行動の実態と包括的性教育の可能性
- 第7章 性的被害と親密性からの／への逃避
- 第8章 青少年の性についての悩み
～自由記述欄への回答からみえるもの～



定価 2,420 円（税込） A 5 判・256 ページ

編／一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会 発行／小学館

全国の書店にて、ご購入いただけます！